きぼうの虹
KIBO NO NJI

発行所
北海道大学生活協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218

きぼうの虹フォトコンテスト特選作品
「様子見」姉崎裕太さん（工学部 学生）

主な記事紹介

四面-五面 第5回フォトコンテスト「北大百景2017」審査結果発表!!
六面 こころの健康を考える㊼ 実ならぬことに意味のある秘
八面 文化財へ行こう 第2回

北海道大学大学院教育学研究院 渡邊 誠
北海道大学客員准教授 角 哲

共謀罪と大学のあり方

大学院文学研究科教授
小田博志

Opinion!

権力者はいつも不安を抱いている。ほんらい思い通りにならない人の心を支配し続けようとするから。ときに疑り深く言動を探り、ときに暴力を使って強制的に人を縛りつけようとする。先ごろ、極めて不当な採決の仕方を経て成立した「共謀罪」法の本質とは、そういうものではないか。単に犯罪を「計画」した段階で刑事罰の対象となり、誰が捜査されるかは警察の恣意に任され、盗聴や密告など手段を選ばない。このように漠然とした恐怖心をただよわせて、人の心を委縮させ、表現と行動の自由を締め付けることに、この不法な法の目論見があるのだろう。これを考え出したのは、他者を信頼し、尊重することができない人間であるに違いない。しかしそうした政治家や官僚たちも大学を出たのだろう。とすると大学のあり方が問われているのではないか。

私たち大学で研究と教育に携わる者は、知の探究のために自由、社会のために倫理、学生のために信頼という価値を重んじる。しかし、近年の日本の政治状況は、そうした価値を崩す方向に進んでいる。武器輸出三原則の撤廃、集団的自衛権の閣議決定、安保法制の強行採決、沖縄の民意を踏みにじる辺野古、高江の米軍基地建設、この共謀罪、さらに憲法改変へと向かおうとする流れ。その中で誠実な言葉と対話がないがしろにされ、トップダウンの不透明な決定が押しつけられ、経済的利益のためなら武器輸出や原発再稼働にも手を伸ばす。こうした傾向に異を唱えるのが、大学人の社会的役割のはずである。

特に私たちの北海道大学において、思い起こさなければならないのは宮澤・レーン事件である。工学部学生の宮澤弘幸君と英語教師のレーン夫妻は、1941年12月8日に特高警察によって逮捕された。宮澤君が旅行中に知った「軍機」をアメリカ人に漏らしたとの嫌疑であったが、それはまったくの冤罪であった。宮澤君は過酷な拷問と服役環境のため病み、27歳の若さで亡くなった。第二、第三の宮澤君を生まないために、彼の名誉回復を果たし、この事件の教訓を構内に刻み、学生たちに広く伝え、宮澤君を犠牲にしたのと同じ危険性をもつ特定秘密保護法や共謀罪法の撤廃を訴えることは、北大教職員の歴史的責務である。

「文明」とは何だろうか？19世紀後半からの帝国主義の歴史の中で、一握りの「文明」国が地球上を植民地化し、先住民族から収奪し、軍事力で対峙して世界大戦を引き起こした。この中で民衆の自由への動きを抑え込むために制定されたのが、「共謀罪」法と同類の治安立法であった。旧「帝国」大学の私たちは、そのことを認識しているだろうか？強欲（経済成長至上主義）と暴力（「安全保障」の名を借りた軍事主義）の「文明」とは違う、〈真の文明〉を構想する場足り得ているだろうか、私たちの大学は？それは軍事研究に手を染めることではないはずだ。そうではなく、他者を支配することも、他者から支配されることもない「人間らしい人間（アイヌ・ネノ・アン・アイヌ）」としての生き方を学ぶ場となることではないだろうか？

全国大学生協連北海道ブロック

「全道教職員理事・監事交流会」報告

6月10日（土）に北大生協会館1階多目的ホールにおいて、全国大学生協連北海道ブロック主催による全道教職員理事・監事交流会が開催されましたので報告します。

全国大学生協連北海道ブロックは、北大生協も加盟している全国大学生協連の「北海道支部」的な組織です。北海道では13の国・公・私立大学生協が全国大学生協連に加盟しているため、この13大学生協と北海道事業連合が北海道ブロックの構成員となっています。各大学生協では理事長を含め複数の理事・監事をその大学の教職員が務めています。北大生協に教職員委員会があるように、北海道ブロックにも教職員委員会がありますが、釧路、北見、帯広、室蘭、函館など遠方の加盟大学生協も多いことから、まとまった活動ができていないのが実状です。こんな中で、生協活動に関わる大学教職員の交流の場を作ろうと、ブロック教職員委員会を中心にこの交流会を企画しました。

昨年末頃からブロック加盟大学生協に積極的に声をかけていたこともあり、当日は各大学生協の専務理事なども含めて約50名の参加がありました。交流会は、お昼過ぎから夕方にかけて次の5件の講演を聴いていただき、夕食を兼ねた懇親会で交流を深めていただく方式にしました。講演会の内容を簡単に紹介します。

1．大学生協の教職員理事・監事の役割

全国大学生協連北海道ブロック運営委員長　吉見宏先生（北大、現北大生協副理事長）

北大生協の監事を長年勤められた経験から、生協の理事・監事の役割を中心に、大学教職員が生協活動に関わる意義についてお話しいただきました。

2．教職員の活動や実践

全国教職員委員会副委員長　高本雅哉先生（信州大）、今山稲子さん（京大）

全国教職員セミナーの紹介を中心に、大学生協連の教職員委員会活動とご自身の大学での生協活動についてお話しいただきました。

3．記念講演「AIは世の中をどう変えるか」

はこだて未来大学生協理事長　松原仁先生

松原先生の専門分野であるAI（人工知能）の歴史と未来を、今話題の将棋対局（プロ棋士対AI）などを例にわかりやすくお話しいただきました。

4．大学生協の共済について

大学生協共済連　鈴木洋介さん

共済連で取り組んでいる「勉学援助制度」（扶養者を亡くされた学生のための緊急援助事業）について紹介いただきました。

5．生協連と大学生協の協力活動について

北海道生協連事務局長　川原敬伸さん

奨学金問題や地域貢献活動などを大学生協とともに取り組みたい。また、大学予算の削減が生協事業へ与える影響が大きいと考えられることから、北海道生協連としては大学予算増について政府への働きかけを行い、大学、大学生協運営の改善につながるよう取り組みを進めたい等のお話しをいただきました。

以上のように多様な講演を、参加者の皆さんは興味深く聴かれていたようです。

講演会終了後に会場を移動して懇親会を行いました。会場は、講演講師の方々への質問や他大学生協の教職員理事や専務との歓談などで、大いに盛り上がりました。北海道ブロックでは、このような活動を今後も続けることでブロックとしての連帯意識を高めていくことにつなげたいと考えています。

最後になりましたが、講演を快く引き受けていただいた講師の皆さんに心から感謝いたします。

（北海道大学生協教職員委員会　間宮春大）

教職員理事監事交流会

未来大松原先生講演

いじわるじいさん

去る6月5日、車いすの乗客が飛行機の搭乗タラップを腕の力で這いのぼったという。バニラ・エアが規則を盾に同行者が車いすを担ぐことを認めなかったためらしい。朝日新聞6月28日朝刊は、奄美空港での出来事とその後の経過を報じ、様子を表すイメージ画も載せた▼昨年4月施行の障害者差別解消法にそぐわない対応だが、法律を持ち出すまでもなく、融通を利かせられなかったかと思う▼なんということをさせるのか、と友人達と話していた時、一人が「辞めていてよかったね」と、会社は違うが客室乗務員をしていた娘の事に触れた。本当にそうだ。もし今も現役でそのような場面に居合わせたら、下っ端職員の娘に反対する勇気はあっただろうか。…もし私なら？　この問題、思いがけない角度から考えさせられている▼新聞記事は、バニラ・エアが奄美空港で、14日からアシストレッチャーを、29日から階段昇降機を導入することになったと伝えている。乗客自身の厳しい経験と強い意志があって、一つ前進した▼この乗客のブログには、あの日、タラップを上がっている途中で、客室乗務員が手伝うと駆け下りてきたとあった。　（今日子）

キャンパス放浪記 in 函館 … 第12回

小さな頃から眺めていた港キャンパス

―構内に入ってみて初めて知った事―

北方生物圏フィールド科学センター
技術補助員　小林 基樹

1. 港キャンパスとの出会い

私が、初めて港キャンパスを見たのは、当時まだ市営バスだった16番の中、４歳頃であった。日吉営業所方向から走り、陸橋を下ると右窓に見えてくる大きな建物。後で知る事となるが、見えるのは正門と管理研究棟（写真１）。背は高いが、一般的な小学・中学・高等学校と大差ない建物に見えていた。「水産学部とは聞いているけど・・・何処に魚などが居るんだ？」。この疑問は36歳になるまで消えることはなかった。

写真1　車窓からの港キャンパス

2. 港キャンパスの中を知る時がきた

縁があって、36歳で構内に入るチャンスがやってきた（写真２）。その時の驚きは新鮮であり、当然ではあるが魚がいて、さらに敷地の奥にはカードキーがいる建屋（マリン棟）もあった。さらにプールにテニスコート・・・。この時に「こんなに広い敷地に色々とあったなんて」と 。さらには、部活動が行われ、応援団も練習していて・・・。実は、親戚が勤めていたこともあり、幼少期に管理研究棟に入ったことはあった。しかし記憶は曖昧で18歳まで函館に住みながら、Uターンした後の36歳にして、港キャンパスで一つの程をなしていることを知った。

3. 私が通ったキャンパスとの比較

私は、工業単科大学に通っていた。３年生以上が通うキャンパスは、面積はほぼ一緒だと思う。池もあった。ただし、雰囲気が違う。例えるならば鉄鋼団地。それに対し港キャンパスは大学だなという感じを受ける。工学部と水産学部、学部の違いで様相が変わることを知ることになった。さらに、母校では、実験系がほとんどなので、研究室にこもり黙々と進める感じであるのに対し、こちらは、フィールドに出てデータを解析しているところも多いという事がわかった。

また、さらなる違いを感じる出来事があった。それは就職活動である。私が通っていた大学は首都圏にあり、就職活動は研究の合間に学生は行っていた。故に色々なエピソードも聞けた。しかし函館にあるこのキャンパス、皆、就職活動へ旅立ちしばらく学生の顔を見ない。一ヶ月近く函館を離れ勉学との両立をするのである。立地がここまで学生生活に違いをおよぼすのかと痛感した。

4. やっぱり離れていても北海道大学

私が学会で札幌キャンパスに行った日のことを思い出す。緑が多く札幌も函館も写真３のごとく同じ様相であるかに感じる（バスが通るところは別として）。理学部の研究室は、港キャンパスの第２研究棟のようなイメージであった。

私の現在の思いは、学生がいるキャンパスは、離れていても北海道大学の特色を濃く出し、札幌と函館という遠隔地であっても、その雰囲気を感じとれるという事である。これが私のキャンパス放浪記。

写真２　学内様子

写真３　道と緑

第5回フォトコンテスト「北大百景2017」審査結果発表!!

審査員：生協学生委員会、院生委員会、教職員委員会、北大教職員写真同好会、生協理事会室から各１名
＊教職員写真同好会の皆さんには、きぼうの虹の表紙写真をはじめ、長い間お世話になっております。この場を借りてお礼申し上げます。

特選および各賞入選者の皆さんには、生協電子マネーチャージを贈呈いたします。

「きぼうの虹フォトコンテスト」です。テーマは昨年に続き「北大百景2017」としました。６月５日から30日までの応募期間で、期間中お天気はずっと良くなかったにもかかわらず、昨年を大幅に上回る67点の作品が寄せられました。どの作品もそれぞれに良さがあり、審査は大変難しかったのですが、特選１点、入選５点を選定させていただきました。入選作品はそれぞれの審査員賞とさせていただきます。また、秋には応募作品の展示会を予定しています。お楽しみに。
応募していただいた皆さん、ありがとうございました。来年もよろしくお願いいたします。

特　選

「様子見」
姉崎　裕太（工学部 学生）

突然カメラをぶら下げて近づいてきた僕を子羊は訝しげな眼で見ていた。

●審査員コメント
日本で一番広いキャンパスをもつ北海道大学は札幌の中心部に位置しています。この広大なキャンパスの中に大きな農場が２つあり、様々な植物や野菜、そして、動物がいます。また、第２農場にある建造物９棟は国の重要文化財に指定されています。本作品は背景にみえる教育研究施設、農場、そして、羊たちとの構成がとても素晴らしく、北海道大学のキャンパスを特徴付ける景色と言えます。

教職員委員会賞

「白に染まった金葉」
新帯　亮平（工学部 学生）

紅葉と雪のコラボが、北13条門で見られました。

●審査員コメント
いつもより少し早く降り積もった雪、イチョウ並木も慌てて葉を落とします。自然の営みの中で一瞬しか見ることのできない色彩を、タイミング良くカメラに収めています。寒いのだけれど心は温かくなりますね。

教職員写真同好会賞

「冬季多難」
梅谷　涼太（農学院 院生）

この季節まで、あっという間ですね。

●審査員コメント
誰もが下を向き、険しい表情で歩いていそうな初冬のある日。あえてカメラを向け、何気ない日常を切り取ったことにセンスの良さを感じます。外灯に照らされた雪、どこまでも続く外灯、題名どおり冬季多難をイメージさせられるすばらしい作品です。

学生委員会賞

「六月の散歩道」
井口　光（農学部 学生）

農場のポプラ並木にて。

●審査員コメント
６月、緑生い茂る中に、１本のうねった小道。どこまで続いているのだろうか。そこに迷い込んだかのような狐と、道の構図が素晴らしい。北大ならではと言えよう。狐はいったい何を見て、どこへ行こうとしているのか。見ている私も、どこか、ふらふらとお散歩したくなるような、そんな１枚。

理事会室賞

「寒い冬の朝」
田村菜穂美（保健科学院 院生）

1月の寒い冬の朝、朝日と馬術部の練習風景。

●審査員コメント
冬の朝の心和む風景を切りとった一枚です。朝早くの馬たちと学生たちの息づかいが、肌を刺す空気の中で聞こえて来るようです。ともすれば生きて動いているものが何も無いかのような雪原の中で、「生きている」鼓動が伝わって来るようで、ほっとさせてくれるとともに、生き物のすばらしさをあらためて感じる作品です。

院生委員会賞

「季節の重なり」
太田　薫平（農学院 院生）

11月6日の中央ローンにて。
まだ紅葉の残る時期に突然の積雪でした。

●審査員コメント
移り行く季節を華麗に収めており、北海道の美しさが表現されています。白い雪の上の彩り豊かな落葉は、現実で直視すれば正直興醒めなものですが、この距離で撮影したからこその美しさが出ています。また、鮮やかな木々に目を奪われがちですが、何気なく写っているサクシュコトニ川にも味があります。

心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院　准教授
渡邊　誠

こころの健康を考える㊼

実らないことに意味のある恋

恋は実った方がいい。それはそうですよね。片想いはつらい、まして失恋はつらい。講義で、若い人が経験するストレスの強い出来事の例として、ときどき失恋の話をするのですが、つらいからやめてください、とか、先生はどれだけたくさん失恋したんですか、とかの感想が寄せられます。そうですよね、どんな形にせよ、実らない恋はつらい。でも、その一方で、実らないことに意味のある恋、というものがある気がしてなりません。ちなみに、身近にいる若い女性何人かに聞いてみると、ああ！わかる気がする！とおっしゃいます。どうも実感として感じている人は、多いような気がします。

そもそも親密な関係というのは、ある意味、怖いものだと思います。まるで相手の気持ちが自分にも宿ってくるようで、どこまでが自分でどこまでが相手だかわからない。少なくとも、そういう部分がある。これを「一つにとけあう」というと、とてもロマンチックで美しく聞こえますが、それには怖い一面もある。だから、どこかそれを予感して、恋が実ることを恐れてしまう。これは、ある意味で健全というか、自然なことのように思います。

また、自分の中の折り合いをつけるのが難しい面が、恋とともにほとばしり出そうになってしまうということ。フランスを代表する知性と言われた詩人のポール・ヴァレリーは、十代で年長の人妻に恋をして、想いを胸に秘めて告げず、それどころか一言も交わさないままに終わります。その後、エロスを「封印」しつつ結婚もするのですが、二十数年を経て、ある夫人と激越な恋に落ち、それ以降は幾人もの相手と死ぬまで激しい恋をし続けて、数千通に及ぶ恋文を書いたといいます。日本のカトリック作家である高橋たか子の『荒野』という小説には、淋しさからぬくもりを求めて男性と肌を重ねる少女の話が出てくるのですが、そのうちに少女はなにか別のものがわかりかけてきて…、それとともに学校の成績がどんどん下がりはじめる…。この話を読んだ時の強い印象は、三十年を経た今も残っています。以前お話しした、愛の壊滅的な顔ですね。実らない恋とは、実れば壊滅的な恋だったのかもしれません。

実らない恋は、人を悶々と苦しめますよね。相手のこと、自分のこと、考えて考えて必死になって考える。少なくとも、そういうことがあり得るでしょう。その中で、否が応でも人として成長する。そういうことは、あると思います。もっとも、成長するために恋をする人はあまりいないでしょうし、成長の代償にしては恋の苦しみはあまりに高くつき過ぎる、と私は思います。まあ、苦しんだことに対するせめてものねぎらいといったところが、実感に近いでしょうか。もっとも、欲望を速やかに満たすことを目指して世の中全体が暴走しているようにも見える現在、そんな叶えられぬ想いに悩み苦しむということがあるのかな、という気もします。

実らぬ恋の美しさ、ということ。実らないことで現実にまみれてしまわない美しさ、まじりけのなさ。こういうといかにも絵空事のように聞こえるでしょうか。でも、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』やゲーテの『若きウェルテルの悩み』に描かれた悲恋を、笑い飛ばすことができる人はどれくらいいるのでしょうか。「希望」のように、絵空事のように見えて、人間にとって非常に大切なものがあるのだと思います。揺れ、もつれ、苦しみ、でも鋼（はがね）のような恋心。それは実らぬ恋の中に、特権のようにしてあらわれてくるものなのかもしれません。

ほけんのお話

Vol. 2

前回は火災保険についてご紹介しましたが、今回はイベントが多く開催されるこれからの季節に向けて、損害保険や賠償責任保険の内容についてご紹介したいと思います。

部活や大学の催し物、スポーツ大会などが多く開催される季節になりました。けがをしたり、他人にけがをさせたり、物を壊したりするリスクがふえる時期でもあります。そんなリスク、一人一人のけがに備えることはもちろん、主催者としての責任を果たさないといけない場面に備えるために、損害保険や賠償責任保険を活用することは、安心して楽しく過ごすために必要なことだと思います。

たとえば、1日の参加者平均人数が20人以上の行事なら『行事参加者傷害保険』、1日の参加者が20人を下回る、または宿泊が伴う行事なら『国内旅行傷害保険』があります。賠償責任特約と組み合わせて『行事参加者傷害保険』なら一人20円から、『国内旅行傷害保険』なら一人100円から申し込むことができます。

北海道協同保険サービスでは、以下の催し物で保険を受付してきました。お気軽にご相談ください。

ソフトボール大会、バドミントン大会、テニス大会、卓球大会、フットサル大会、野球大会、部活合宿、学科研修、サッカー大会、少林寺拳法大会、科学教室、子ども会遠足、見学会、日帰り観光、バスツアー、天文観望会、体験入学、オープンキャンパス

北海道協同保険サービス 生協会館店1階　（平日）10:00～18:00（土曜日）10:00-13:00（休日）日・祝・年末年始
TEL 011-726-0441　FAX 011-746-9065　Eメール hoken.cls@hokkaido.seikyou.ne.jp

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の４つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■第1回学生総代会議（総代のつどい）

7月3、5日に第1回学生総代会議を北部食堂にて開催しました。総代の方に総代としての役割を認識してもらい、また、総代としてのやりがいを感じてもらうことを目的としています。今年度の学生総代会議も、昨年同様、柔らかい雰囲気を感じてもらうため、「総代のつどい」という名称で開催しております。また、「店舗クリニック」と題し、クイズ形式で北部購買をまわってもらい、より店舗を知ってもらおうという企画も行いました。購買をよく知れた、などの意見をいただき、多くの方に満足していただきました。今年度は、10月と12月にも開催予定です。

■学生委員会公式HP、Twitter

http://hokudaigi.web.fc2.com/
@HU_COOP_GI_CS

学生委員会の活動や学生委員の日頃の様子など、学生委員会のことについて詳しく知りたい方は、公式HP・Twitterをどうぞご覧ください。

■学生委員会連絡先

gakusei@coop.hokudai.ac.jp

学生委員会に意見・質問のある方は、こちらのメールアドレスにご連絡ください。

これからも学生委員会をよろしくお願いします!!

院生委員会

■6月24日（土）〝院生交流ジンパ2017〟を開催しました。参加者19名

開催当日は、あいにくの雨。降ったり止んだりの天候でした。参加者は、院生17名（院生委員5名含む）と生協職員2名（新入職員、理事会室職員）、あわせて19名が集まって北海道の風物詩・ジンギスカンを囲んで交流しました。参加された院生の内訳では、文系4名、農・理・工系・環境12名、医・歯・薬・保健・獣医系1名となっています。今年は幅広い研究科（院）からの参加がありました。

参加者からは、「次も交流企画をやってほしい」「来年もジンパをやってほしい」などありがたい声をいただくことができました。

留学生委員会

■さくらんぼ狩り食べ放題と小樽運河自由散策バスツアー」を開催

7月8日（土）生協組合員（留学生優先）とその家族を対象に、乳幼児や子ども連れ家族・友達同士・カップル、個人参加等8ヵ国57人（日本人2名のみ）が参加。ギラギラ強い日差しもなんのその次々と手を伸ばしてもぎ取っては口に頬張っていました。

農園を例年の仁木町から余市町に変更した分、小樽滞在時間を長くしました。ソフトクリームが溶けて洋服や手が汚れた女性たちの悲鳴や笑い声が続きました。みなさん十分に楽しんでいただけたようで、無事に帰札しました。

これからも留学生の要望を収集しながら生協らしいイベント開催の工夫をしていきます。

教職員委員会

■教職員総代会議　学内7ヶ所で8月を除く毎月1回、昼休みを利用して開催しています。生協の営業報告の後、教職員の皆様に利用者の立場から色々なご意見をうかがっています。

6月は13日～15日、7月は11日～13日に開催しました。

■教職員委員会　毎月1回、18時～19時半に開催しています。総代会議で上がった組合員の声についての検討、きぼうの虹の編集・発行について討議しています。

6月は15日、7月は18日に開催しました。

■「きぼうの虹」　この冊子です。教職員委員会が編集し偶数月に発行しています。

今号は前号が「半分カラー」だったため、フォトコンテストの入選発表なのに半分カラーとなりました。また、写真の入った「文化財へ行こう」をカラー印刷となる最終ページに移動しています。

【編集後記】

きぼうの虹371号をお届けします。

フォトコンテストの入選発表です。今年の応募作品は「冬景色」がたくさんありました。四季折々にキャンパスの写真を撮り貯めている方も多いのですね。そのせいか入選作品も「冬景色」が多くなりました。フォトコンを始めて以来のことです。応募していただいた皆さん、ほんとうにありがとうございました。

文化財へ行こう

第2回

～北海道大学総合博物館 最大の“展示物”～

北海道大学客員准教授　角 哲

総合博物館正面

キャンパスの憩いの場であるエルムの森の隣に威風堂々とした北海道大学総合博物館があります。今回は、年間30万人の入館者があり、本学が掲げる「開かれたキャンパス」実践の最前線にある同館最大の〝展示物〟に目を向けます。

早期の大規模鉄筋コンクリート造である建物

総合博物館は、総合大学として理学部設置を悲願とした当時の北海道帝国大学が、昭和4年11月に理学部本館として建設しました（現在も理学部事務室があります）。

注目されるのは、この建築が本学ひいては北海道における早期の大規模鉄筋コンクリート造建築であることです。「え？」と違和感をおぼえる方がいるかも知れませんが、この建築は煉瓦造ではなく、仕上げに6色のレンガタイルを用いているのです。このタイルは「スクラッチタイル」と呼ばれ、焼く前、表面に引っ掻き加工を施した多くの筋が入っているものです。全体が柔らかく趣ある印象なのは、こうした手仕事の跡にほかなりません。

二つの様式が混在する建物

様式も見逃せず、「ロマネスク」や「ゴシック」と説明されます。共にヨーロッパ中世の教会や修道院を中心に用いられました。特に12～15世紀のゴシック様式は、後に世界の大学を彩り、その影響は近代の日本にも及びます。ただ、総合博物館には2つの様式が混在しています。違いの一端を簡単に説明すると、窓上部や軒下のアーチ列などの半円モチーフがロマネスク様式、正面車寄せなどの先の尖ったアーチのモチーフが、その発展型であるゴシック様式の特徴です。「アインシュタインドーム」と呼ばれる中央階段の天井部分にも尖頭アーチがあり、Xに交差する部材が構成するドーム天井もゴシック様式の特徴のひとつです。2つの様式を巧みに組合せ、全体を構成したのは、設計管理を担った本学技師・萩原惇正の遊び心とデザイン能力の顕れでしょう。

当時の構造と施工の特徴と痕跡

構造は近代の合理性を反映し、全体は概ね均等間隔で割り振られた柱と梁でなっています。この形式を「ラーメン構造」（Rahmen：額縁）といい、現在、最も一般的な構造の形式です。ただ、柱と梁の繋ぎ目に頬杖の様な「ハンチ」という部材があり、この時代の特徴といえます。これは地震などで建物がねじれた際、接合部が外れない様に補強するものです。また、梁の上には床板が載りますが、板の下、つまり天井に目を凝らすと、10～20cm程度の間隔で線があることに気づきます。これはコンクリートを流し込むときの型枠の跡で、現在の様な畳大の型枠板がない時代、幅の細い板を組合せて施工した痕跡なのです。

ハンチ

天井のコンクリート型枠の跡

現役建物の活用方法

ところで、総合博物館は昨年7月に耐震改修工事を終えてリニューアルオープンしました。工事の際、関係者は可能な限り古い部分を残すことを考えました。しかし、保存と共に重要なのは活用の方法で、現役の建築である以上、展示や研究に支障があってはいけません。そこで、段差解消を目的とした教員室前の廊下に木製の床、正面玄関横にバリアフリー玄関の昇降機を設置するなどしました。こうした新しいことが一目瞭然なものを〝足し算〟することで、今後より良い方法での改修が可能になった場合、付加したものを撤去することで当初の状態に戻せるのです。なお、バリアフリー玄関には総合博物館・演習林・農学部・卒業生の協力の元に建築の学生が設計・施工したウッドデッキが設置され、キャンパスの新たなオープンスペースとなりました。総合博物館に足を運べば、その魅力をすぐに理解できるでしょう。そのとき、最大の展示物にも目を凝らしてみてください。

大工さんに指導を受けてウッドデッキの工事をする学生